

日本聖公会 全国青年ネットワークニュース

第35号

2010年11月25日発行

第5回 日韓聖公会青年セミナー 2010

8月11日～16日、長崎カトリックセンターを主会場として、「第5回 日韓聖公会青年セミナー」(管区青年委員会主催)が開催された。日本から10名の青年と8名のスタッフ、韓国から12名の青年と2名のスタッフ、総勢32名が参加。

九州教区「平和を考えるプログラム」スタッフの準備段階からの協力もあり、原爆遺跡巡り、被爆者証言、軍艦島訪問、8月15日の聖餐式(韓国の独立記念日/日本の敗戦記念日)など多様なプログラムが行われた。日本の被害と加害の歴史を学び、今年「韓国強制併合100年」の節目であることもふまえ、これからの日韓関係のあり方を考えた。

第5回 日韓聖公会青年セミナー 2010

長崎で紡ぐ

川村 マリ

(北関東教区/聖パウロ礼拝堂)

私は8月11日から16日までの日程で、長崎で開催された第五回日韓聖公会青年セミナーに参加した。

青年参加者22名でのセミナー、私にとっては韓国から参加した仲間と向き合い、ゆっくりと話す好機となった。

関東で生まれて育った私には「長崎」は修学旅行定番の地、大戦での被爆地、キリシタン殉教の地といった「定型の印象」だったが、現地のプログラムに身を置くことによって、それらの表層の印象は見事に打ち砕かれた。

歴史に直面し、自分の言葉では表すことができない「時の重み」を実感すると同時に、連なる事柄に想いを馳せた。その中では高實康稔さんの朝鮮併合についてのお話は殊の外、私には印象的だった。日韓の現代史を丁寧に分析され、支配と被支配の構造や朝鮮人被爆者問題を扱われるその姿勢には圧倒された。

強制連行には企業や民間人も関与していたことに触れ、連行された地で戦禍に見舞われた朝鮮出身の方々の被害を思うと、「国家権力が人間の生き様に介入、支配する時」「強い者に従属し命を得る日」の酷さ、惨めさ、浅ましさと悲しさで心が震える。

日本のキリスト教会が、朝鮮半島へ宣教師を送り込み、皇民化政策推進の手先となって「ふたつの神」に仕えた現代史を消し去ることはできない。

翻って、私は長崎で得たものを今後どのように生かすのかを自問自答している。これはなかなかの問題だ。

私にとって日韓セミナーは昨年に続いて2回目の参加になった。幸いなことに物事や歴史を

複眼的に捉える心がけを持つようになった。さらにセミナーで繋がる両国の知人、友人が増えた。欲を言えば、これから日本からの参加者をもっと増やす必要があると思う。

一方で悲観はしていない。セミナーや関連する場、集いを通じて「人間関係を紡ぐ」ことにささやかな参加を続けたい。

長崎の地に立てば、朝鮮半島が近いことはもちろん、琉球や台湾、フィリピンの人々とシェアすることも大切と気づく。海を越えて、友情や知遇の「糸」で織り成された布地が「平和」だと思う。政府の交渉や力に依存してはいけない。民が向き合うとき、それを持続することで新しい命が生まれると私は信じている。



高實康稔さんが理事を務める岡まさはる記念館。日本の加害の歴史が展示されている。



移動中の休憩場所にて。
筆者(左から2人目)と日韓双方の参加者。



第5回 日韓聖公会青年セミナー 2010

一人の十歩より、十人の一歩

～これからの日本と韓国の歩み～

西川 亘

(中部教区/愛知聖ルカ教会)

今回のセミナーで一番印象に残ったことは、韓国の青年たちとの歴史に対する向き合い方の違いでした。個人、または国による教育の違いで、同じ歴史を学んでも感じ方が違うのは当たり前かもしれません。しかし大きく違ったのは、韓国の青年たちは歴史そのものを尊重しているという感じがしたということでした。

もちろん日本でも、歴史を学びそれを尊重するという方もいると思います。しかし、今回の場合は少なくとも自分の目には、日本と韓国の間には歴史に対する接し方が違うという感じが強くしました。

私は今まで自分の国の歴史について、学校の勉強としてしか捉えてきませんでした。今回のセミナーを通して、その捉え方をしているは何も変えられないし、せっかく素晴らしいお話を聴き、様々な体験をしても今後活かしてはいけないということに改め気づかされました。それを気づかされたのは、分かち合いというその日一日を振り返るという時間の中でした。

分かち合いをしていく中で、ある青年のことばが私の頭の中に残りました。「一人の十歩より、十人の一

歩」これは、簡単にいくことではありません。ですが、「百聞は一見にしかず」ということわざの通り、自分たちで実際問題が起きている場所に赴き、その現状やありのままの姿を見て、真実の話を聞く。これこそが、歴史を含めた様々な問題に対してとるべき行動であると気づかされました。今はインターネットが普及し、世界中の情報を、自宅からでも簡単に得ることが出来ます。ただし、そうした情報は事実ではなく、一人の人が感じた考えかもしれません。だからこそ、自分の目で耳で可能な限り本物の姿を見ることが大事であるということが、今回のセミナーを通して分かりました。

今回のセミナーで得た、問題の起こっている姿を自分の目で見て体験することが大事であるということをお忘れずにこれからの人生を歩んでいきたいです。そして、自分が学んだことを同世代の人たちに伝えていき、十人の人の一歩踏み出す瞬間の背中を押せるようになりたいと思います。

最後になりましたが、今回の体験で、文化や個の否定や排除、国を任された人たちのお粗末な考えやつまらないプライドによって、国民が犠牲にさらされ、生命が軽々しく扱われていく、それが戦争というものなんだなと思いました。

今回のセミナー関わった日韓領国のすべての方々に、そしてこの夏のすばらしい体験に感謝します。

第2回韓国スタディ・ツアー —各地域での多様な社会宣教の現場から学ぶ—

大韓聖公会では、社会宣教プログラムの一環として、殊に1980年代から始まった「ナヌメジップ（分かち合いの家）」の働きを中心に、様々な活動が生まれており、それが、今日の大韓聖公会の成長に大きく寄与していると言われている。

大韓聖公会の諸教会の働きに学びながら、日本聖公会における今後の働きを考える機会、また人材養成の機会にしたいの願いからこのスタディ・ツアーが開催された。（主催：日本聖公会正義と平和委員会・日韓協働プロジェクト）

成岡 宏晃

（大阪教区／大阪聖アンデレ教会）

6月7日から11日の日程で、大韓聖公会の社会宣教の現場でのスタディツアーに参加させていただきました。今回は私を含めて7名の参加者が、ホームレス支援や高齢者の雇用支援、家出をした青少年のためのシェルターなど「分かち合いの家」と呼ばれる、いくつかの自立活動支援センターを訪ねました。「分かち合いの家」は大田教区において農村伝道を始めたことがきっかけとなり、地域社会に根付いた宣教を模索し、導き出した一つの形であるということでした。現場のフィールドワークをする前に、現代の韓国におけるキリスト教が、社会的に否定的な立場に置かれているということを講演の中で聞きました。その講演の中で最も印象的だったことは、イエス・キリストの福音宣教の実践について考えるということでした。こういった中で、大韓聖公会に連なる皆さんが大田教区の宣教活動においてもっとも大切にしておられ、且つ私たちに伝えたかったことは、「地域と社会と時代に根ざした福音宣教」について考えることでした。それを実践するには、それぞれの地域社会における最も豊かな形で、生きた福音を感じられる教会の働きを模索していかなければならないということだと思います。



高齢者や女性の方の雇用支援作業

このツアーを通して、使徒言行録の1章8節に記されている「そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、私の証人となる」というイエス様の言葉を思い浮かべました。イエス様の福音を宣べ伝えるという働きは、イエス様の働きを、イエス様の生きざまを、私たち自身の心身を通してこの世において体現することです。また、「世の終わりまで」、「地の果てまで」というみ言葉は、イエス様の福音宣教の限りない可能性を表していると思います。その結果、現在では世界各地で、紆余曲折はあれども、それぞれの地域や社会に根付いた形でイエス様の福音が生き続けています。もちろん、ただ語り継がれてきただけでなく、多くのキリスト者がそれぞれのタレントを用いて、時代や社会環境において最も必要とされている福音宣教の形を求め続け、多種多様な歴史を積み重ねてきました。身の周りにモノがあふれ、人間の価値観がますます多様化していく現代の日本において、私たちキリスト者青年がこれからの時代の中で証していくべき福音宣教の形とは一体何なのでしょう。

現代の日本社会には、何らかの原因によって苦難や困難を強いられている方が大勢います。今、私たちが為すべきことは、この日本社会の中でイエス様の生きざまを証しするという事ではないでしょうか。コリントの信徒への手紙一13章でパウロが語っているように、どのような業もその一挙手一投足に愛がなければ何の益もありません。自分と他者とのかわりの中で、まず目の前にいる一人を大切にすること、そんな些細なことの積み重ねが社会の連帯につながるし、その接着剤としての教会の在り方を模索していけたらいいと思います。

この旅を最初から最後まで共にいて見守ってくださった神さま、ソウル教区の李大晟（イ デソン）司祭をはじめ、私たちに快く受け入れ心づくしのおもてなしをして下さった大韓聖公会の皆さま、通訳の労を担ってくださった呉光現さん、中村香さん、柳時京司祭、そして団長を務めて下さった武藤謙一司祭に心から感謝いたします。

2010年 沖縄週間 / 沖縄の旅

主催 日本聖公会 沖縄教区宣教部
日本聖公会 正義と平和委員会

沖縄週間は、日本聖公会の全教区・教会が沖縄の現実に思いを寄せ、私たち自身が主の平和を求めて祈ることを目的とするものです。

沖縄教区と日本聖公会正義と平和委員会は、この週間にあわせ、毎年この時期に沖縄の歴史及び現在を学ぶ旅を行っています。



松山 健作

(京都教区 / 京都聖ステパノ教会)

青い海、綺麗な空、南国の空気。沖縄で感じることのできる感動は、非常に多い。2010年6月18日から行われた沖縄の旅に私は参加した。直接沖縄に関わることのできる立場でない。それは重々承知している。しかし、なぜか沖縄に引き寄せられる自分がある。直接沖縄に関わる決心があるわけでもないのくせに沖縄が気になる。沖縄に恋でもしているのだろうか・・・良くも悪くも、沖縄という地域は、私の中で非常に魅力的な地域である。そして、訪れるごとに新しい発見を与えてくれる。刺激的な地域であることは間違いないだろう。

沖縄を訪れると、いつも嬉しいことは、現地の人々が温かく歓迎してくれることだ。何か私自身も温かい気持ちを受けて、便乗できるような気にさえなる。この沖縄の人間味ある雰囲気は、非常に魅力的である。一方で、こんなに温かい人たちが毎日立ち向かわなければならない問題が沖縄には山積みである。それは、すでに良く知られていることであろう。今年も、普天間基地移設論が多く世間に知れ渡った。この流れにおいて、伊江島を訪問し、阿波根昌鴻氏の足跡を辿る学びは、私にとって意味があった。特に彼の反戦への志しは、抑圧を受けている生の声として、今もなお聞こえてくるような思いさえ感じさせられる。これは伊江島を訪れ、現地の状況とそこに住む人の声を聴くことができたからだろうか。阿波根氏は、現代の私たちにこう語ってくれた。

「何でも生かしていかなければならない。戦争がない平和な島を、どうしても作っていかなければならない。私はそう強く思っております。」

この引用は、阿波根氏の「わしの夢のこと」で語られる最後の部分である。日本は、常に沖縄に対して抑圧的である。それは歴史が物語る証拠である。その脈は、近代史から言えば、琉球処分に端を成すだろう。そこから始まった支配的構造の歴史は、今もなお続いているような気がする。日本のおよそ75%の米軍基地が沖縄に集中し、海兵隊が訓練し、いつでも戦争を始めることができる体制が整えられている。今の日本の情勢は、再び多くの人々に苦難を強いて、過ちを繰り返す方向へと向かっている。

私たちはどうにかして、この日本の抑圧的状况を打破しなければならないだろう。平和の為に、あるいは和解の為に、今私たちにできることは抑圧の力に非暴力をもって対抗することである。自らが、武器を捨て、反戦を訴える。それ以外に、私たちが抑圧の中から抜け出す方法はないのではないのか。歴史からの多くの痛みと苦しみは今も続き、継続されようとしている。キリスト者は、それに気づき、気づかされ、信仰とその勇気によって、これからの歩みをより確かな方向へと引き寄せていかなければならない。そのために、私たちの主イエス・キリストが力をお貸して下さることを信じてやまない。

広島平和礼拝 2010

8月6日(木)～7日(金)

主催： 神戸教区 広島平和礼拝実行委員会
広島復活教会
管区 正義と平和委員会

以下の3点を目的に、毎年広島被爆の日に合わせて行われるプログラムです。

1. 原爆犠牲者を追悼し、世界平和のために祈る。
2. 原爆の悲惨さ、戦争の愚かさを時代を担う人たちに伝える。
3. 「主の平和」を学び、その実現のために活動する。

永野 拓也

(神戸教区/神戸聖ヨハネ教会)

私は今年広島礼拝2010に参加しました。これまで、教区の中高生のキャンプを通して、部分的に参加したことはありますが、すべてのプログラムに参加するのは今年が初めてのことでした。

何故、広島平和礼拝2010に参加したかと言いますと、5月に「キリストの平和」という題で青年交流会が行われたことが大きな要因です。そこで、神戸教区の仲間たちと、イエス・キリストの思い描いた平和とはどのようなものだったのか、ということを通して考える機会を与えられたからです。そういうこともあって、個人的には「キリストの平和」とは何なのかということを知りたいと思い、広島平和礼拝2010に参加することにしました。プログラムは、6日の原爆犠牲者追悼聖餐式や碑巡り、カトリック教会との合同プログラムなど様々でした。

それでは、広島平和礼拝2010で何を感じたのか。それをみなさんに伝えることが求められていると思います。しかし、正直に言いますと伝えるよりも、みなさんに足を

運んでもらって感じてもらうほうが良いと思っています。というのも、さきほども述べたように私は5月に青年交流会でキリストの平和について考えました。自分なりに向き合ったつもりでもありました。しかしながら、原爆で被災された方々の詩や碑巡りの案内役をしてくれた高校生を見ると、何とも言えない気持ちになったのも事実です。その気持ちとは、平和に対する心からの思いだったような気がします。

広島平和礼拝2010に出て印象に残っているのは、自分の体験や自分の町を通して、心の底から平和を思う気持ちを伝える人々の姿でした。今の私には、広島の人々のように平和について語ることはできません。それ故に、何をどうすればいいかも分かりません。ただ、私は来年も広島平和礼拝に参加したいと思います。来年の私が何を感ずるか分かりませんが、平和を思う人々の祈りの場に交わらせていただきたいと思っています。

最後になりますが、もし時間があれば来年の広島平和礼拝と一緒に参加してみませんか。もちろん、広島以外でも平和について祈ることはできますし、学ぶこともできます。ただ、全国にちらばる青年のみなさんと、広島で平和について考え、共に祈りをささげることができればと思います。

各教区報告

【京都教区】 青年のためのシェアリングの集い「ほとり」

楠本 綾子 (京都教区/下鴨キリスト教会)
山本実瑞紀 (京都教区/京都聖マリア教会)

「ほとり」をしようと思ったのは、去年の年末にポーランドで開催されたフランス・テゼ共同体のヨーロッパ青年大会に参加した事がきっかけでした。その大会の中で「土の上で、落ちただけでは種は育たない。神様との信頼を築くためには、種のように光や水が必要である」このメッセージに心を動かされた、友人の山本実瑞紀さんが「私達一人ひとりの土の上に落ちた信仰の種は、自分と神様だけの関係ではなく教会や人の関わりによって育っていくものだと気付かされた。日本に帰ったら、青年達とお互い持っているものを分かち合い、信仰を深めていける、そんな場を作っていきたい」と話してくれました。その思いに私も共感し、一緒にやっていきたいと思い今日に至っています。

ほとりを企画していく段階で「上手くいくんだろうか・・・」と不安がありました。しかし、大会と一緒にいったもう一人の友人、服部樹美さんが「それが神様の御心ならスムーズにいよいよ」と言ってくれた言葉を支えに進めていくと、すんなりと周囲の協力が得られ、スムーズに事が運び出したので「これは神様の御心に叶っているんだな」と自信をもてる様になりました。

「ほとり」は、人と人との繋がりを通して信仰を深め、語り合う中でお互いの心の中に響くものがある、そんな場にしたいと願っています。その為、聖公会だけでなくエキュメニカルな集いを目指し活動しています。今年2月からスタートし、これまで4回開催しています。毎回5～10名前後の参加者があり、神様の事、教会の事、日常で感じる事など自分の思いを話し、お互いに分かち合っています。私にとって「ほとり」は、自分を見つめ直すとても良い機会になっています。機会があれば、ぜひお気軽に参加して頂ければと思います。

Welcome to Japan!

クリステン・ミルズさん（米国・ボストン出身）は、今年8月から名古屋学生青年センターが留学生として受け入れた米国聖公会の青年です。子ども英会話クラス・みつば幼児グループ（保育）・国際子ども学校の教師の助手として、ささしま共生会ではデイサービスのお手伝いとして活動する傍ら、名古屋YWCAに通って日本語を勉強しています。

将来は米国で司祭になりたいと考えており、日本で様々な経験を積みたいと期待しています。来年の夏まで滞在を予定しています。各教区のプログラムにご招待頂ければ幸いです。

（名古屋学生青年センター）



クリステン・ミルズさん

リレートーク 平和のかたち 4

今回は、聖公会の司祭である両親を持ち、在世修道院の超教派フランチェスコ会に所属するチャールズさんにご執筆頂きました。

「平和」の反対とは何か？「戦争」はすぐに思い浮かぶが、それだけだろうか。

全世界を人の体、人間一人一人を細胞に例えると、平和は全体の健康である。「健康」の反対は、「病気」だけではなく、「肥満」や「栄養不足」でもある。同様に、戦争がなくても、人が安全に生きるために必要な物を得ることができなければ、平和だとは言えない。平和の反対は「貧困」、「不正」、「人権抑圧」でもある。

従って、身体の一部だけを健康にし、残りを無視することはできない。同様に、平和を実現するには、全ての人の基本的要求が満たされなければならない。「格差」、「不平等」、「差別」も平和の反対である。

最後に、完全に健康になるということとはできない。運動や栄養のバランスで健康を積極的に保ち続けることが必要である。同様に、「世界がもう平和になった」と言える日は来ない。常に「地球の健康」を積極的に保たなければならない。それが我々「細胞」の使命。

Br. チャールズ・コワルスキー
（超教派フランチェスコ会）

日本聖公会青年プログラム参加助成制度をご利用下さい！

◆青年プログラム参加助成制度とは・・・

この助成制度は、日本聖公会の青年たちが、様々な研修・プログラムに参加し、その経験を日本聖公会、とりわけ青年活動に生かすことを目的とし、参加にかかる費用を補助するものです。日本聖公会青年委員会が運営し、各教区に設置された「青年担当者」（以下のリスト参照）が窓口となります。詳しくは、全国青年ネットワークホームページをご覧ください。

各教区青年担当者

北海道教区：下澤 昌 司祭
東北教区：越山哲也 司祭
北関東教区：木村直樹 司祭
東京教区：卓 志雄 司祭

横浜教区：片山 兼 司祭
中部教区：金 善姫 執事
京都教区：小林 聡 司祭
大阪教区：磯 晴久 司祭

神戸教区：林 和広 司祭
九州教区：早川 成さん
沖縄教区：岩佐直人 執事

★プログラム案内を随時更新している【ブログ】や、【メーリングリスト】への登録の方法も、全国青年ネットホームページから見る事が出来ます。

全国青年ネットワーク

検索

発行 日本聖公会全国青年ネットワーク事務局

名古屋市昭和区宮東町 260

tel 052-781-0165 fax 052-781-4334

e-mail youth.po@nssk.org

www.nssk.org/province/youth/